

# LIBRARY INFORMATION



HENG O FLIES TO THE MOON

附属図書館の昨日・今日 —現状と当面の課題……………	図書館長 池田 廉……………	2
「大阪外国語大学学術講演会（石浜文庫記念）」の歩み〔資料〕……………		5
『学術講演会』を聴く		
「魏志」倭人伝をめぐって—吉野ヶ里遺跡の発掘に関して……………	同志社大学教授 森 浩一……………	6
「魏志倭人伝」の読み方……………	中国語学科助教授 森 博達……………	7
「魏志」倭人伝の衣服……………	歴史学助教授 武田 佐知子……………	8
スダ文学に見る“超自然力をもつ生き物の話”……………	インドネシア語学科客員教授 アイブ・ロシディ……………	9
ジル・ドゥルーズと意味のパラドクス……………	フランス語学科 三宅 祥雄……………	9
外大図書館の思い出……………	アラビア語学科 4年 河合 寿美代……………	11
フライトゥ・ザ・ムーン—E.T.C. Werner :		
MYTHS AND LEGENDS OF CHINA ……………	中国語学科講師 上 神 忠 彦……………	13

大阪外国語大学附属図書館 1990.3.27

# FORMATION

第6号

## 附属図書館の昨日・今日 — 現状と当面の課題 —

図書館長 池田 廉

現在のキャンパスに移転して、本学は昨年で早くも10周年を迎えた。本図書館の実態調査(昨年3月)によると、現在、全所蔵冊数は42万冊を越えた。そのことは、当初の設計上の収容可能な蔵書数42万冊をすでに超過し始めたことを意味する。また、閲覧座席数についても、現在の席数291は、移転時の288とほとんど変わっていない。この10年の間に、本学では、日本語学科の新設があり、3つの語学科が複合型の学科に改称された。したがって、教官・学生数の増加もかなり上る。たとえば、1部の学生定員が130名、2部が5名の増加を見ている。まことに移転当初の予想よりも、かなり早いテンポで、蔵書数と利用者が増えている。こうして、図書資料が量においても質においても充実し、利用者の増加を見るのは、何よりも慶ばしいことである。ここ当分、限られたスペースを高率よく工夫して対応することを、考えなければならない。

しかし、マクロ的に見れば、附属図書館の課題が、施設の改善に集約される段階に入ったと言えることができよう。ところで、このことに関連して、まず、次のことを述べておかなければならない。

昨年度図書館の要整備面積は、1,770平米であったが、新校舎(E棟)建設のために、全学的見地から供出することとなった。したがって、なるべく速やかに新たなキャンパスの拡充計画が実現されることを期待し、その時点での図書館の抜本的な改善を考えなければならない。具体的な解決手段として、現在のところ「視聴覚教育委員会」提出の「コミュニケーション科学研究センター」の構想が具体化することを希っている。これによって図書館内に設置されているLL教室などの設備の移転が可能となろう。だが、今後の図書館に於いて、それでは何が求められ、どのような形で拡充するのがよいか、そうした点について、具体案を詰める段階に来ている。

さてマクロの議論は別の機会に譲るとして、ここでは、この2年間の図書館の歩みを総括しておきたい。まず、蔵書に関していえば、昨年から本年にかけて、2件のコレクション収蔵があった。その1は、故名誉教授國沢慶一先生の遺族の寄贈による「國沢文庫」(主にイスパニア・ポルトガル関係図書資料約2,000冊)であり、その2は、大型コレクション「チェルク系諸言語コレクション」(約1,600冊)の受入れである。また同窓などの個人的な寄贈や図書資料充実のための寄付があり、これについては、主な方々の名を録すに留める。イスパニア語関係の図書資料で、岡本和夫氏、故川本進君(イスパニア語学科院生)の遺族、中国語学科の吉井一郎氏(イスラエル関係図書)、フランス語学科の大倉一豊氏であり、他に基本図書の寄贈で、インド領事館、ミャンマー大使館、イタリア・アニエッリ財団で、関係各位に対しては厚く謝意を表したい。

ところで、収書に関して、学生や教官の利用率が高い基本図書資料の充実を優先するか、それとも長期的な視点に立って、稀少価値をもつ、いわば本学にあってこそ一層要望に応えうる貴重資料の収蔵を重んじるべきか、というテーマは、大学図書館のつねに当面する問題であろう。だが、いろいろな制約上、大筋では一定の方向性が出ている。たとえば、最近の図書購入費の上昇に必ずしもスライドしない図書予算の限界とか、大学相互間の共同利用とか、学情システムへの積極的な取り組みとか、こうした状況の下で、当然のことながら本学では外国語図書資料の充実に重点が置かれる。しかも、貴重なコレクションとして「石浜文庫」があり、ある意味でそれを補完するものと言える、「チェルク系諸言語コレクション」が今年収蔵できたことは喜ばしいことである。

他方、山口前図書館長の尽力で、閲覧室の一角に整備された「地図コーナー」に関しては、最近に収書を予定しているものに、オルテリウ

ス『世界の舞台』の69葉の地図帳がある。この書は、ラテン語初版(1570年)に基づくドイツ語版(172年)であり、原典の所有者が同時代の地図学者であり、その自筆の英語訳が、ドイツ語文のヴェルススに丹念に手書きされていて、興味深い。なお同書の解題は、次号に掲載の予定である。しかしながら、この「コーナー」の設置のために、奨学寄附金を提供された同窓広岡寅治氏(旧制第4回卒)が、一昨年10月急逝され、こうした整備状況をお伝えできなかったことはまことに残念である。心から哀悼の意を表したい。

次に、図書館に関連する委員会について述べれば、昨年2月の教授会において、従来の「図書委員会」は、「学術出版委員会」及び「図書館委員会」に発展的に改組されることとなった。改組の主な理由は、従来の「図書委員会」の運営では、職務権限について疑義が残ること、また図書館の運営に関して、組織面での対応の遅れ、が指摘されたことである。その結果、本年度から、他の国立大学図書館の同種の組織のように、館長を委員長とする「図書館委員会」の発足を見た。

これらの改革が実を結んだのは、前年度の「図書委員会」(桑島・石田正副委員長)の熱心な審議があったればこそである。図書館運営を大局的な立場から論議する場としての「委員会」の

役割は従前にもまして大きいと言えよう。他方、「学術出版委員会」の発足によって、教官の学術的成果の発表の場が少し広がることになりそうである。従来通り年2回刊行の『大阪外国語大学論集』(1989年、改題)のほかに、本年『大阪外国語大学学術研究双書』の創刊を見る運びとなった。近年は文科系の学術図書の出版は、出版界の採算ベースに乗りにくいなどの事情もあって、やや停滞しているように思える。その意味でも、この『双書』の一層の発展を期待したい。素直に言って、図書館の業務はさらに増えるわけだが、学内の学術研究の振興に陰の貢献ができればと願っている。なお今回の「委員会」の改組に伴って、後に述べるように、内規などの若干の見直しが必要となった。

次に、「大阪外国語大学学術講演会(石浜文庫記念)」について、簡単に説明しておきたい。同講演会の沿革を振り返ると、故石浜純太郎博士の蔵書が遺族から寄贈されたのが昭和45年で、その「文庫目録」が完成したのは2年後のことである。その完成を記念して昭和54年4月25日毎日会館国際サロン「第1回記念講演会」が催された。講師に作家井上靖氏を招いての「敦煌の旅・新疆の旅」及び京都大学教授西田龍雄氏による「石浜純太郎博士と東洋学」の演題であった。そして1昨年、「第10回記念講演会」をもち、石浜紅子氏「私の祖父とシルクロード」、作



家小松左京氏「地球化時代の外語教育」、本学教授君塚進氏「1862年の遣欧使節」の講演によって盛況の内に終わることができた。この10年間、亡き石浜博士に学問的にゆかりの深い講演者を招くことができ博士の遺志を偲びつつ、東洋学の貴重な講演を聴く機会に恵まれた。ことに、ここ数年は本学での秋の「学術講演会」として定例となり、学内外の研究者や学生のはかに周辺地区住民の来聴者も増えるに至った。因みに「同講演会」の足跡は、別に一覧表を掲げる。

こうして10年に及ぶ「石浜文庫記念講演会」を通して、当初の趣旨は一応達成されたと考えられた。一方、学内的には新たな両委員会の発足があった。したがって、この機会に同講演会の新しい展開を図るために、また運営の母体を明確化しておく必要からも、その実施について、再検討する必要が生じた。平成元年11月30日の教授会において、そのことについて館長の報告があった。その結果、年末から年初にかけて、上記の教授会委員会による2度の合同委員会が開かれ、また「特殊文庫運営委員会」にも諮られて、合意事項がまとまった。本年2月22日の教授会で、これらの事項について審議の後、次の申し合わせが承認された。ここで、その要点を書き留めておく。

(1)「学術講演会」の毎年一回の開催。(2)その運営は、図書館長を中心に、上記の委員会及び「特殊文庫運営」委員会より各2名、すなわち計6名の協議によって行うこと。(3)5年毎に「石浜文庫記念」の名前を冠すること。

なお次回の、「第11回大阪外国語大学学術講演会(石浜文庫記念)」は、平成5年に行うことが予定された。また、この準備には、現在の「特殊文庫運営委員」のメンバーが全員参加することも追記されている。この開催については、できれば2年前から周知な準備をして行うこと、従来の行事をさらに発展するような形が望ましいこと、といった声が「文庫運営委員会」の中から上がっていることも、記録しておきたい。

なお、「特殊文庫運営委員会」を構成する委員は、同文庫の創設の当初から引き続いてその任務に当たっているが、この間、伴、辻本、吉田(弥)名誉教授の退官があり、また不幸にも間野教授を失い、そのために現在7名で運営して

いる。いずれ適当な折りに、館長と同委員会とで諮って、東洋学に関わる教官を補充しておく必要があるだろう。

さて、こうして一昨年以来の「図書委員会」の努力が実って、平成元年に発足した「図書館委員会」は、昨年4回の委員会を開き、順調に滑り出すことができた。その主な議題を記すと、収書委員4名、市川、三宅、和田、秋田委員(一年交代)の選出。大型コレクション及び特別図書の優先順位の決定。前述の「講演会運営」に関連して「学術出版委員会」との合同委員会の開催。さらに、「國沢文庫」の新設に関連して、現行の「寄贈資料に文庫名を付与する基準」の若干の見直しの審議がある。もっとも最後の案件については現在審議中である。

この「講演会」と共に、図書館で行われている重要な行事に、秋の「図書展示会」があるが、「講演会」の開催と時期を合わせて、昨年度は「石浜文庫に関連した図書展」を、本年度は「國沢文庫とモラエス」のテーマで展示会を催した。何分にも展示会室をもたないために、閲覧室の一隅での展示ではあるが、外部の聴衆も来館する時期であり、今後も開かれた活動の一つとして進めて行きたい。なお、その詳細の解説はその都度なされているが、モラエス図書資料については、従来の蔵書の他に、今回岡本和夫氏の寄贈によるものがある。また、閲覧室が静謐な雰囲気を持ち、できれば芸術的な香りの漂うたたずまいであることは、誰しもの希いであろうが、昨年タイ語の吉川教授から寄贈された古代カンボジャの女神像は、人目に付かないかも知れないが、二階の展示台の中で眠っている。

最後に、その他の活動状況について、簡単に触れておこう。

#### 1 電算化の現状

本年2月、データ量が150,000冊を越えた。昨年4月にリプレースを行ったが、現在システムソフトのバージョンアップを実現するまでには至っていない。予定より少し遅れているが、来るべき夏期休暇中でも、バージョン4の導入が計ればと準備中である。この実現によって得る利点として、次の事柄が考えられる。

(a) 目標作成業務の効率化。(b) 雑誌管理システ

ムの大幅な改良の結果として、学術雑誌総合目録への対応及び、学情センターからのダウンロード。(c) 検索管理システムの改良による利用者サービスの向上。すなわち、現在の一画面検索を図書・雑誌の一括検索による、情報の細分化、条件指定等の可能性。要するに、研究者の側からは検索のスピード・アップや近い将来、研究室のパソコンから自由に検索することが可能になるわけで、メリットは大きいと言える。もっとも、システム・コンバージョンは簡単にできるとしても、その後の蓄積したデータ処理、或いは変換が重要であり、明らかに図書館員の負担は大きくなる。

## 2 視聴覚教育施設の機器更新

冒頭で述べたように、施設の拡充が急務となってきたと同様に、視聴覚教育施設、及び機器の整備も、移転後10年を迎え、曲がり角にさしかかっていると言える。この点に関しては、「視聴覚教育委員会」をバックアップして年毎に努力を重ねると共に、斬新な構想で、外国語・外国文化のための視聴覚教育のメッカとしての機能を一層強化していかなければならない。移転直後には、進んだ学内施設をかなりの数の来館者が参観に見えたのは周知のとおりである。

3 旧分類図書目録の作成ほか学内教育研究特別経費によるプロジェクトとしては、本年2件を実施している。その内、「昭和24年度以前の図書の整理」については、年度内に「和書目録」を印刷する予定である。なお、同計画はなおかなりの業務を残しており、何らかの形で、継続

が図られることが望ましい。他方、「石浜文庫及び國沢文庫の整備」については、「石浜文庫目録」(1977年版)の未収図書の中で、手紙類、古文書類の整理を進めてはいるが、手付かずの資料もかなり上る。さらに、『文庫目録』は、内外の研究者からの強い要望があるが、殆ど在庫をもたない。「國沢文庫」については、目録作成作業もほぼ終りに近く、3月中に印刷が終わるよう努力中である。

## 4 閲覧業務のサービス向上

年度内に、閲覧カウンターの移設を実施するが、これによって、最近の利用者の増加に対応して、さらに多少なりとスペースを確保したいと考えている。と同時に、低カウンターの設置で、レファレンス業務が一層強化されるように、また電子情報等にもある程度対応できればと考えている。

以上、最近の主な業務について思いつくままに記録した。大学の諸施設の中でも、いわば研究・教育の中樞神経とも呼びうる本学図書館の、施設拡充の必要性が改めて痛感される。なるべく早いうちに、多くの方々の協力を得て知恵を絞っての斬新な構想で、将来展望が開かれることを願っている。近年は収書の点数が増え、業務内容も多岐にわたってきている。この場をかりて、日々刻苦精励して業務にたずさわっている職員の苦勞に感謝したい。本稿作成に当たって、田上事務長及び岸本専門員の協力を得たことを付記して、稿を終えたい。



## 「大阪外国語大学学術講演会 (石浜文庫記念)」の歩み〔資料〕

### 講演日程

- |   |    |             |         |        |
|---|----|-------------|---------|--------|
| 1 | 昭和 | 54・4・25 (水) | 国際サロン   | 午後1～4時 |
| 2 |    | 55・6・24 (火) | 読売文化ホール | 2～4時   |

3	56・6・11 (木) 高島屋ローズシアター	1～4時半
4	57・6・10 (木) 同	同
5	58・5・21 (土) 大阪普門館	1時半～4時半
6	59・6・2 (土) 大学図書館視聴覚ホール	同
7	60・6・8 (土) 同	同
8	61・11・15 (土) 同	同
9	62・10・29 (木) 同	同
10	63・10・29 (土) 同	同

I 平成元年・10・25 (水) 同 1～4

#### 演題と講演者

- 1 井上靖「敦煌の旅・新疆の旅」、西田龍雄「石浜純太郎博士と東洋学」
  - 2 司馬遼太郎「秦末の動乱と中国社会」、井本英一「飛鳥の石」
  - 3 陳舜臣「西域事情」、勝藤猛「アフガニスタンに学ぶ」
  - 4 加藤九祚「中央アジアに於ける最近の考古学的発見」、松村多美子「文化と学術情報」、大野徹「イラワジ川とビルマ文化」
  - 5 石浜恒夫「父の思い出」、山田信夫「ウイグル文書の話」、法橋和彦「トルストイと東洋の心」
  - 6 藤枝晃「石浜先生と敦煌学」、橋本勝「モンゴル諸語とその周辺」
  - 7 外山軍治「石浜先生と石浜文庫」、濱口乃二雄「ポルトガル人と日本教会史」
  - 8 角山栄「緑茶文化と紅茶文化」、相浦杲「日本人と中国語の世界」
  - 9 西田龍雄「西夏の話」、武田佐和子「古代の国際関係と衣服」
  - 10 石浜紅子「私の祖父とシルクロード」、小松左京「日本からの発信—地球化時代の外語教育」、君塚進「1862年の遣欧使節に関する若干のことども」
- I 森浩一・森博達・武田佐和子「『魏志』倭人伝をめぐって—吉野ヶ里遺跡の発掘に関連して」、アイブ・ロシディ・森村蕃 (通訳)「スダ文学に見る“超自然力をもつ生き物の話”」

### “学術講演会を聴く1”

## 『魏志』倭人伝をめぐって — 吉野ヶ里遺跡の発掘に関係して

同志社大学教授 森 浩 一

佐賀県吉野ヶ里遺跡は県や町の技師の活躍によりほぼその全貌が明らかにされ、大和中心主義に傾きがちな考古学界の「常識」を覆えることになった。この遺跡は単なる村落ではなく、種々の手工業生産を行っていた弥生時代の大規模な環濠都市の遺跡である。しかも、約300年続いたその終末期が「魏志倭人伝」の卑弥呼の時代(3世紀)にほぼ相当することで、一層重要性を増す。『魏志』は撰者陳寿の同時代史といえ

るものであり、そのうえ潤色が少ない点で史料価値がきわめて高いからである。

① 「倭人伝」によれば、魏と倭の間で詔勅や上表文が交わされ、倭使は漢語で「大夫」と自称し、魏の詔勅でも「汝大夫難升米」と呼びかけていることがわかる。少なくとも弥生後期の北部九州は漢字使用圏と見なされていたのであろう。

② 「倭人伝」によれば、倭では養蚕が行わ

れ、縑や倭錦という超高級絹織物が生産されていた。全国の弥生遺跡で絹織物が出土している所は北部九州に限られており、ここから「倭人伝」の記事がどこを中心に描いたものが推測される。なお、布目順郎氏の研究によれば、吉野ヶ里出土の絹織物の生糸は江南原産の蚕によるものである。

③ 「倭人伝」によれば、卑弥呼は魏帝から銅鏡100枚を賜与されており、日本の一部の学者はそれを三角縁神獸鏡に比定している。しかし、近畿を中心に数多く出土する三角縁神獸鏡は中国から一枚も出土しておらず、魏鏡説は成立し難い。

④ 卑弥呼のように女性が君臨する国は中国

人にとっては珍しいものであったが、日本の古代では女性が権力をもつことは珍しくない。奈良時代の美濃の戸籍では、戸主の母親のみが奴隷をもっている例も見られる。

⑤ 吉野ヶ里出土の人骨は、人類学者によれば渡来系と見なされているが、甕棺などは朝鮮にはなく、墓制は日本式である。おそらく倭人化が速かったのであろう。

『魏略』の逸文によれば、倭人は呉の太伯(中原から越人地帯に入った)の子孫と言われており、日本でも江戸時代まで「神武天皇は呉の太伯である」という学説が有力であった。倭人のルーツを考えるうえでも、「魏志倭人伝」などの古代の史料を読み直す必要がある。

## “学術講演会を聴く2”

# 『魏志』倭人伝の読み方

中国語学科助教授 森 博 達

佐賀県吉野ヶ里遺跡から続々と出土した弥生後期の遺構や遺物は、いわゆる「魏志倭人伝」の記述を彷彿させるものであった。こうして、「魏志東夷伝倭人条」の重要な史料価値が再認識されることとなった。

およそ文章を読むには、①「なにが」、②「どのように」、③「なぜ」書かれているのか、という三点に着目しなければならない。

① 「倭人伝」は漢文史料であり、正確な読解のためには、漢語や漢文法の基本的な知識が不可欠である。たとえば、女王卑弥呼に関して次のような記事がある(訓読)。

男弟有りて佐けて国を治む。王と為りし自り以来、見る者少なし。婢千人を以て自ら侍らしむ。唯男子一人有りて、飲食を給し辞を伝え出入す。

一説によれば、圈点部の「男子」をすぐ前の男弟と見なすが、それは文法上成立し難い。原文は「唯<sub>○</sub>有男子一人」とあり、「男子」の語は「有」字に導かれており、文法上、既知(既出)の人物ではありえないからである。

② 史書の編纂には数多くの資料が参照される。「倭人伝」でも同様である。「漢書地理志」

や詔勅などの官府の記録に拠った箇処もある。使者の報告書も用いられたであろう。

東夷各国の戸数表記を見ると、夫余から濊までの四国はすべて「戸○○」と簡潔な表現を用いているが、三韓では「○○家(戸)」となり、倭では「有(可)○○戸(家)」とやや冗漫な表現になっている。各群で異なった原史料が用いられたのであろう。

また、「魏志」が著わされるはるか以前の事柄に「今」という語を用いている所がある。これも無批判に原史料を利用したためであろう。倭人条では、特に、社会と風習を記した箇処の行文が雑然としている。陳寿は各種の資料から抜粋した箇処を自分の文章によって十分に再構成しなかったのであろう。

③ 「東夷伝」を立てる由来を述べた総序では、東夷に中原の美しい遺風が保たれていることが強調され、東方を収復した魏の功業が暗に讃えられている。倭人条にある骨ト・籩豆・搏手などは中国で失われた礼法と共通するものであり、これらの記載は総序に示された立伝の意図の具体的な表われである。

倭人条で中原の遺風の記載以上に顕著なのが、地理・物産・風俗・言語などについて江南との親縁性を特記した箇処である。倭人社会につい

ての情報のルートとしては、帯方郡経由のルート以外に、直接江南と結ばれたルートがあったのかもしれない。(了)

### “學術講演会を聴く3”

## 『魏志』倭人伝の衣服

歴史学助教授 武田 佐知子

世は映像の時代である。物事の視覚化、具象化があらゆる場面で要求されている。考古学の方面においても、遺跡の重要性、保存の要を広く世に訴えていくために、復元想像図や模型などの作成が、作業の重要な一環になりつつある。遺跡の穴のつらなりだけからではイメージしにくい当時の生活を、ピピッドに浮かび上げらせることができるからである。

ところで近年最大の考古学のトピックに、吉野ヶ里遺跡の発掘が挙げられよう。

特に邪馬台国との関連で、この遺跡が人々の関心を集めたために、推定復元された吉野ヶ里の楼観の上に、卑弥呼を立たせようとか、竪穴住居の中に憩う邪馬台国の人々を配してみようとの試みが、様々になされることになった。そこでこんな問い合わせが私のところにもやってくる。当時の人々はどんな衣服を着ていた？卑弥呼はなにを着ていた？そればかりではない。

「大人」、「下戸」、魏への使者……。そして中国への航海を守るために、彼の船に乗せられた、髪は伸び放題、蚤しらみをわかせたままの「持哀」etc,まるでドラマの時代考証みたいに、『魏志』倭人伝の、すべての登場人物の衣服の推定が、要求されるのである。

だが私は文献史家である。したがって『魏志』倭人伝の記載を軸に、あくまでも文献に忠実にそこに書かれていることと、考古学の出土遺物から、推論を積み重ねていかなければならない。

そもそも衣服の時代考証が始まったのは、いつからのことだろうか？「百人一首」の絵札には、天智天皇と順徳院が、生存年代に六百年のへだたりがありながら、同じ衣冠束帯に身をつつんでいる。聖徳太子も聖武天皇も、ながらく

この姿で描かれ続けてきた。こうしたなかで、『魏志』倭人伝の記述を、はじめて古代人の衣服を復元する素材にしたのは、江戸時代半ばの学者、藤貞幹である。しかし中国の文献の史料価値を評価しない国学系の学者たちは、『魏志』倭人伝の衣服記載は、海南島の風俗のひきうつしにすぎないとして、これをしりぞけてきた。

大正十五年に高橋健自が、帝室博物館の講演で、原始時代の衣服を想定する材料として倭人伝を援用し、二種の衣服の復元想像図を示した。高橋の所説の特徴は、倭人伝にいう「貫頭衣」を、幅広の布の真ん中をくり抜いて頭を出す、ポンチョのような衣服と想定し、また「横幅衣」を、長い布をサリーのように身体に巻きつけた、袈裟式の衣とするところにある。そしてこれが、ながく通説としての地位を保ってきたといえよう。しかし出土する弥生時代の織機では、三十センチ以上の幅の布は織れない。したがってポンチョ状の衣服の想定には、難があるとしなければならぬのである。結論からいうと私は、倭人伝にいう貫頭衣は、布を二枚並べて綴り合わせたもので、例えていえば袖のない、膝までの丈の和服のようなものと想定している。そして実は横幅衣も、貫頭衣と同じ形態のものであったと考えている。古代の文献史料、考古学資料から知られるところでは、衣服の性別分化の徴証は認められないからである。中国正史の蛮夷伝には、様々な形態の貫頭衣、横幅衣の記述があって、それらがけっして一樣のものでなかったことが知られる。こうした中であって、『新唐書』には、横幅衣であって貫頭衣でもあるという衣服の記載が見られる。それは横に二幅布を並べ、頭を真ん中から出すもので、別名を「通裙」と



いうとある。つまりワンピースだというのである。これは私が倭人伝から推定した貫頭衣、横幅衣の形態に同じい。倭人伝は同じ形態の衣服を、衣服作成法の上から称して横幅衣といい、

また衣服着用法から貫頭衣と呼んだ結果、あたかも別形態の二種の衣服が存在したかのような認識を生んだのだと考えられる。

## “學術講演会を聴く4”

### — スンダ文学に見る“超自然力をもつ生き物の話” —

アイプ・ロシディ

スンダ文学とは、スンダ語で書かれたり伝えられたりする文学のことである。スンダ語は、400を越すインドネシア地域諸言語の一つで、その話者の数は、ジャワ語に次いで第二番めに多い。西部ジャワのスンダの地古来の叙事詩といわれる「パントゥン叙事詩」(Carita Pantun)は、Sang Kuriangなどの民話と同様、イスラム伝播以前のスンダ人の宗教観を描写する。有名なパントゥン叙事詩にはLutung Kasarung, Mundinglaya di Kusuwa, Ciung Wanara, Nyi Sumur Bandungなどがあるが、これらには「越人的生き物の世界」や、その世界に住む「越人的生き物」が登場する。例えば、神の世界(Dunia Dewa-Dewa)に住む神(Dewa)、超能力人間の世界(Kahayangan)に住む超能力者 Sanghiang (または Hyang)や天女 Bidadariである。また、スンダ人の信仰にまつわる話(Cerita-Cerita)の中にも、或る時は人間に、或る時は虎に変身

する超能力の生き物(Aden-Aden)と、その住む地(Negeri Aden-Aden)が描写されている。イスラムとイスラム文化が渡来するに及び、アラビアとベルシャの超人的生き物も伝えられた。例えば、妖精 Jin、悪魔 Setan ないし Syaitan である。改作されたイスラム文学作品には、これらの超人的生き物が多く登場する。スンダの定型詩 Wawacan にも Jin や Jin の世界が多く描写され、人間との関わりを持っている。また、Moh. Ambri の小説、Ki Umbara の短編などの現代の文学作品にも、スンダ人の不思議な世界に対する信仰が描かれ、いろいろな超自然力を持つ生き物が登場する。例えば、Jin, Setan のほか、霊 Siluman である。霊 Siluman の住む世界が霊界(Dunia Siluman)である。Siluman には人間の霊や動物の霊があり、これらもやはり人間生活と深い関わりを持って描かれている。

## ジル・ドゥルーズと意味のパラドクス

フランス語学科 三宅 祥雄

本国フランスでの公刊からすでに20余年を経ようというのに、その日本語訳が出たのはつい2年半前、今なおまともな研究書も見あたらず、必ずしも同業者たちの正当な扱いを受けているとはいいがたいG・ドゥルーズの『意味の論理学』は、しかし、疑いもなく現代を代表すもつとも重要な哲学者のひとつであり、少なくともこの哲学者の、何冊かに限定されてよい主要な

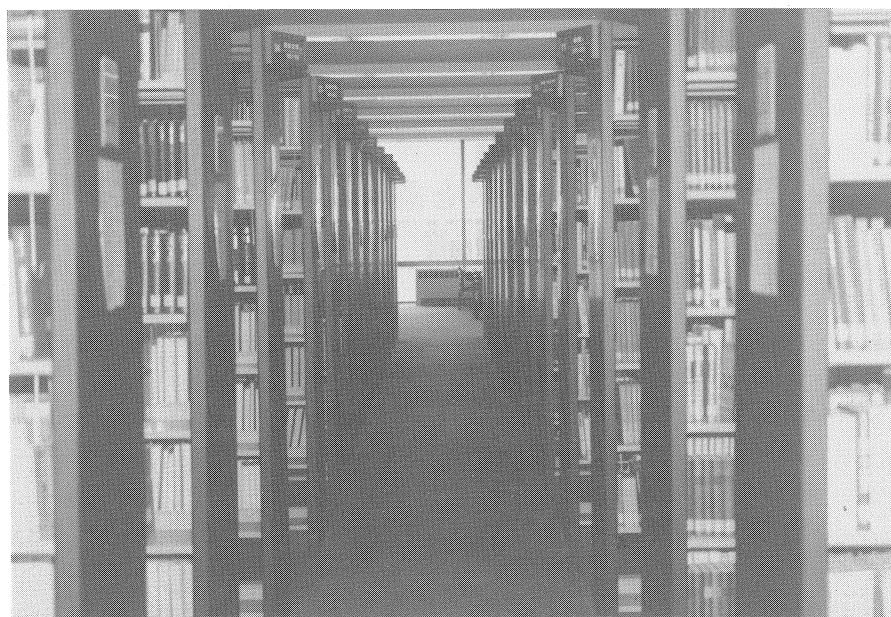
作品群の中心を占めている。往々にして文化産業としての商品価値のみが喧伝されがちなフランス現代思想の騒々しくも華やかな舞台装置にあって、単独者ドゥルーズが保持する一風変わった位置とスタンスは、学派をつくらず、これといった後継者にも恵まれず、お抱えの注釈者などはなから歯牙にもかけない点で、1940-50年代におけるサルトルのそれに似かよっていな

いでもない。だが、世紀末に近い1990年の現在、いまだに時代遅れのサルトリヤン(Sartrien)を自認する私のような怠惰な人間にとって、資質も違えば傾向も異なる両哲学者への関心は、何よりもまず、高校倫理社会の時間に刷り込まれたにちがいない哲学者のある原イメージ、すなわち、飛翔する矢の運動を否定し、アキレスが亀に追いつけないことを証明してみせたあの古代ギリシアのソフィストたちへの素朴で新鮮な驚きと切り離せない。たとえば、友人ピエールの不在は私に無の現実性を直観させるが、無はあることもないことも不可能であるから、それはもっぱら存在されるとしか表現できない、等々。1970年代の初めごろ、松浪信三郎氏の名訳で『存在と無』のこんな一節を大真面目な顔で読みふけていた大学二年生の私は、頭の体操もどきの詭弁をつらね、荒唐無稽なパラドクスで善良な読者をけむに巻くといった、哲学をまっとうにこころぎす者ならけっして認めてならないはずの態度を、むしろ名誉ある哲学者の特権に、その悲壮な社会的使命にまですり換えようと躍起になっていたふしがある。

だから、『意味の論理学』を初めて手にしたとき、それまで『存在と無』の一冊を『嘔吐』以上によくできた小説、哲学の言葉を仮装した一種の神話的・形而上学的物語として読み続けて

いた私にとって、「本書は論理的かつ精神分析的な小説の試みにほかならぬ」と宣言するドゥルーズ自身のいさぎよい口調は、長年親しんだサルトルのテキストにもまして、私の癒やしきれないトラウマを再び掘り起こす効果があったのだろう。事実、「ルイス・キャロルからストア学派へ」と題された序文は、意味とは何かを問う古典的だがいまだ納得のいく解答に出会ったためしはない周知の議論において、問題が<sup>コン・サンス</sup>つねにさまざまなパラドクスと、さらには詭弁や無意味とさえ不可分であることを教えてくれる。

意味とは何か。言葉が言葉として理解されるのは、いうまでもなくそれが意味を含むからである。だが、意味は言葉が指示する個別的事物やその状態ではないし、記号表現に対する記号内容、あるいは語る主体が表明する自己自身の信念・欲望でもない。なるほど言葉が意味を表現するのは当然だから、言語にとって意味はつねに事物の側に属するといっているが、他方、意味が事物や主体や一般概念から区別される非実在的で非人称的な存在である以上、事物の側から見れば、あくまで言語のうちにしつこく<sup>ア</sup>存続しているよう現れるはずだ。事物と言語を隔てる境界線としての、両者のいずれにも還元されない第三身分としての意味＝出来事。しかもこの境界はいかほどの厚みももたない純粋な表層



であり、肉体の裏側を完膚なきまでにさらけだす上唇と下唇が接合する部分、要するに、それぞれの側で事物と言語を映し出す双面の鏡のような存在である。すべてはこの境界で生起し、かつ滑らかで限界のないこの表層においてのみ生起する。なぜなら、意味としての出来事は事物と言語、肉体の内部と外部、そして鏡のこちら側と向こう側を、あたかもメビウスのねじれた円環のごとくに、ただひとつの拡がりによってつなぎとめるからである。「君が何ごとかを口にすれば、それは唇を通してやってくる。ところで、君は今、荷車と口にする。だから、その荷車は君の口を通してやってくる。」(クリュシッポスのパラドクス)

私が言葉を口にするときには「私は《一挙に》意味のうちに身をすえている」。意味むしろ発話の前提であるから、これこれの事物、これこれの信念として、言語によって指示され表明されることは不可能である。要するに、「私は自分が口にしていることの意味などけっして口にしない」ということだ。だから、意味とは何かと問うても無駄である。意味への問いは、鎖の両端に手がとどかない無限遡行のパラドクスに行き着くか、さもなければ、テープレコーダーとの対話にも似た不毛な反復のパラドクスに終始せざるをえないからである。ころみに、人間とは何かと問うてみよう。人間は理性的動物である。では、理性とは何であるか。感覚や心像ではなく、概念によって思考する能力のことである。とすれば、感覚とは、心像とは、概念とは、云々。ある語の意味を指示する別の語は当然それ自身の意味を表現してもいるのだから、その意味を指示するためにはさらにもうひとつの別の語が必要となる( $n_1 \rightarrow n_2$ の意味を指示する $n_2 \rightarrow$

$n_2$ の意味を指示する $n_3 \dots$ )。ここでは語から語へのたえざる指し向けによって、意味への問いがつねに先へ先へと繰り延べられるのであり、逆にいうと、鏡像としての意味＝出来事が自らのうちに他の鏡像を映しだす鏡像として無限の増殖を続けているわけである。別名フレーゲのパラドクスとも呼ばれる意味の無限遡行は、同時に『鏡の国のアリス』第八章で、歌の名前(柵の腰かけて→手段と方法→老いた老いたる男→鱈の目)をめぐるアリスと白騎士がかわず珍妙にして深遠な対話のメイン・テーマでもある。そして第二のパラドクス(不毛な反復のパラドクス)が現れるのも、意味への問いに疲れはてた人間がこの第一のパラドクスを回避しようと決断するまさにその瞬間においてである。たとえば、私は不愉快だということ私がいわんとしているのは、結局のところ、私は不愉快だということ以外の何ものでもありえない、といった具合に。

だから、《para-doxe》はあくまで虚偽とは区別されねばならない。それは通念 doxe からずれ落ちた para 思考として、すりきれた意味にしがみつくと常識(思考の絞切り型)を転倒するとともに、真理はただひとつの意味しかもたないとする良識の信念にひびをいれる。意味は同時に複数の意味としてのみ存在し、そこには意味にあらざる意味すなわち無意味すら含まれるというのが、さまざまなパラドクスによって構築された旧くて新しい意味理論の教訓ではあった。G. Deleuze, Logique du sens, Editions de Minuit, 1969.

岡田・宇波訳『意味の論理学』、法政大学出版局、1987年。

## 外大図書館の思い出

A 語科・4年 河合 寿美代

外大図書館には4年間お世話になった。私がこの図書館で気に入っているのは閲覧室である。といっても閲覧室そのものというよりは、そこ

からの眺めである。窓の外に広がる市街の景色は、晴れた日はもちろんのこと、夜景もなかなかすばらしい。このような良い環境に恵まれて

いると、勉強する意欲も出てくる。といたいだが、実際には景色に見とれていたり、居眠りしたりすることもあった。しかし外大図書館は、市街の喧噪に悩まされることもなく、緑に囲まれ、立地としては申し分ないと思う。

では、図書館を利用して私が感じたことや、私の友人の意見を紹介しよう。

まず貸出、返却事務が機械化されているので、手続きが簡単であること。高校までの学校図書館のような手続きの面倒さがなくて、時間もかからないから、授業間の短い時間でも本を借りたり返したりできて、とてもありがたかった。

さて、最近多くの図書館は視聴覚資料を中心とした特殊資料を収集する傾向にあるそうだ。

外大の図書館にも多くの視聴覚資料が揃っているが、他の図書館と違って特殊なのは、視聴覚資料係が独自にこの管理・運営を行っているということである。この視聴覚資料係は、L1教室やその他視聴覚機器の入っている教室の管理や授業用教材の準備や授業のサポートといった業務まで行っている。

視聴覚部門を図書館と見なすかどうかは微妙なところで、この特殊性は外大図書館の大きな特色といえる。

視聴覚部門には、テープライブラリーがある。授業のない時など、映画のビデオや音楽のテープを視聴して、語学力を磨くのに役立てる。私が一年のころは、ビデオはTV放送の録画を編集したものが多かったけれども、最近ではLDも充実してきている。それに、衛星放送が視聴できるようにもなって、国際的な視野や知識を広げることができる。

ただ、私個人としては、ビデオやLDが字幕の時はいいが、バイリンガルの時は日本語と外国語を両方聴くという器用な芸当ができなかった。おかげで最初の方は英語で聴いて途中で挫折して日本語に切り換える。というパターンを繰り返してしまって、そのことが今でも残念に思われてならない。

しかし、このテープライブラリーにヒントを得て、下宿でもTVの映画などでバイリンガルのものではできるだけ英語で聴くようにしている。そういった意味では、図書館が動機づけの役割も果たしてくれたことになる。

次に、図書館を利用して不便に感じたこと、改善してほしいことを挙げてみたい。

まずオンライン目録の検索について。私達が実際に使ってみて、同様な意味を持つ検索語を用いても、その語によって該当図書の情報が変わってしまうのは困った。例えば私達の専攻関係でいうと、検索語「イスラム」、「イスラーム」、「ISLAM」を用いると該当図書冊数だけでも全く異なる。

さらに、キーワードをもっと充実させてほしいという声がよく聞かれる。図書のタイトル、著書、ジャンル、分類番号だけではなく、その図書の中に出てくる主要語句などにまで広げてほしいものである。どこまで広げるかに関しては、図書館側でもいろいろ議論されるところだろう。しかし利用者側としては、求める図書のうち検索画面に出てこないものは最小限にとどめてほしいのである。

そこで、思い切ってキーワードはできうる限り広くしてしまったらいかがかなものだろうか。該当図書がある程度増えてしまっても構わないと思う。あとは利用者が複数の検索語を与えて図書を絞り込んでいけばいい。

そのためにも、オンライン目録の検索方法や利用例などをのせたマニュアルを充実させ、しかもより多くの利用者に、その内容を理解してもらえるようにリーフレットを作成するなどのPRを行うといいのではないかと思う。

この図書館には、すばらしい機械や設備、そして何より価値ある図書に恵まれているのだから、もっともっと活用してもらいたい。

その他、改善してほしい点としては、辞書、事典類の充実ということが挙げられる。特に各



専攻語・地域関係の辞書、事典類をもっと揃えてほしいという意見が学生の間にある。専攻によって、その量や質に差がありすぎるので、少ない言語・地域に関しては積極的に収集するよう検討を望む。

そして最後にもう一つ。各研究室に置かれている図書をもう少し開架の方にも揃えてもらいたい、ということである。学生は自分の専攻語以外の研究室に行きにくい、常に研究室が開いているわけではない、などの理由で研究室にある図書を借りづらいようである。図書が重複し

てしまうので予算や書架スペースの問題があるのはわかっている。その上で開架の方にもできるだけ図書を揃えてもらうことを希望する。というのが学生達の生の声である。

私達の思っていることばかり、言いたい放題書いてしまったが、参考意見として耳を傾けていただいて、改善できる点は改善して下さいれば幸いである。

外大図書館が、今後もよりよい図書館へと発展していかれることを期待している。

## フライ・トゥ・ザ・ムーン —— E. T. Werner : — MYTHS AND LEGENDS OF CHINA

中国語学科講師 上 神 忠 彦

この大学の「石浜文庫」におさめられているこの本 *Myths and legends of China* 『中国の神話と伝説』は、ひとりのイギリス人によって北京で英文でかかれ、1922年にロンドンで出版された。

著者ワーナー Werner, Edward Theodore Chalmers (1864-1954) はもともと外交官である。1884年以後中国各地で勤務のち、清朝から民国へわたる激動の三年間、福州領事をつとめた。

アヘン戦争以後中国への侵略を展開、植民地を経営した大英帝国の役人として行動する一方、中国社会に興味をもち、退職後も中国に残って中国政府の歴史編纂局員、のち中国歴史学会会長をつとめ、その歴史、社会、民俗、神話などを研究し、理解、紹介しようとした中国研究者でもあった。日中戦争のさい日本軍が捕えて投獄したという、わが日本との縁もあるという。他に、*Descriptive sociology* (ed. H. Spencer): *Chinese, China of the Chinese, A dictionary of Chinese mythology* 等の著書がある。

13世紀末(元代)のマルコ・ポーロによる東方の「見聞」ののち、15~16世紀の西洋諸国による「世界」の拡大(その記録の一部は前号に

紹介があった)をへて、16世紀宗教改革後の布教競争が中国(明代)におよんだが、その宣教師たちによって知らされた中国の言語、文化の断片は、西洋人にとって、すでに十分難解でエキゾチックなものであったろう。

しかし18世紀の産業革命ののち、インドからさらに中国にふみこんでいったイギリスのアヘン戦争、負けじとそれに続いた帝国主義列強の侵略が進むにつれ、中国から「輸出」されたり略奪された文物が少からず伝えられた。敦煌も発掘されて、西洋人にとっては植民地の金もうけ以外にも、いろいろ「文化」的興味をそそられ、ある種の異国ブームもあったにちがいない。大英博物館は官蔵の大コレクションであるが、いまこの地で、洋画のシーンにあらわれる骨董品やビクトリア期から流行したイギリスの食器のデザインを見るだけでも、その一端はうかがい知ることができる。

そのような時期に、著者は中国にあって中国を研究し、神話や伝説について、この本で紹介したのである。

なかには中国人画家による三十二枚の図版をつけており、その一部は本号のおもてうら表紙等に写真があるが、これもそのカラーのあざやかさと中国画の手法とふしぎな図柄で、西洋人

の目と興味をひくのに十分であったと思われる。

著者は中国神話のおもな原資料として、つぎのものをあげている。

『歴代神仙通鑑』	32巻
『神仙列伝』	8巻
『封神演義』	8巻
『搜神記』	10巻

西洋人でしかも外交官が本職であった著者は、北京の四庫全書を活用し、これらのなかから翻訳、釈読をおこない、「これまで知るかぎりでは、中国語以外の言語でかかれた中国神話についての唯一のモノグラフ」との自負をもって、これを出版した。たしかに労作である。

上の原資料は、後代いろいろな神話、伝説をよせあつめ、あるいはまとめたものが多いようである。もともと神話、伝説は権力の意図でオーソライズされない限り、その本来の成りたちからいっても、伝える人や書物や版、またその注釈等によって、内容にバリエーションが多くなる宿命をもっている。

中国の神話・伝説はもともと、『楚辞』『山海経』『莊子』『呂氏春秋』『淮南子』『詩経』『左伝』などに、多く断片的に、そして簡潔に、また重複して、しかもかなりのバリエーションをもってあらわれている。どれをとるか、どうつなぐかなど、たいへんむずかしい問題である。たとえば後出の西王母は仙人の女王だが、怪獣ばかりの悪神（『山海経』）と桃の実をもった不老のおしゃれ美女（現在の中国人のイメージ）というほどの差がある。また、たとえば、あとに紹介する羿（と嫦娥）の物語にかんしても多数の異なった断片的資料があつて、小川環樹『中国小説史の研究』でもそのつきあわせがおこなわれている。そのため著者はなるべくストーリーのできあがつた資料によつたものとおもわれる。そしてことに『封神演義』がすきだったようである。

本書で、まず著者は「中国人の社会学」として、民族、結婚形態、政治、軍、教育、辨髪・纏足等の身体的習俗、葬礼、交際法、風習、遊戯、家庭生活、産業、農牧畜、道德観、知識、言語などのテーマについて計47ページで簡単な紹介をする。全般に、古代と当代に重点がある

ようだ。

つぎに、「中国の神話体系」について、計16ページで概説する。著書は、民族によって神話の豊かさと貧しさがあり、ギリシャとスカンジナビアは前者で、他は後者だという。

中国人はけっして想像力に乏しくはないが、その心は世界的な不滅の神話を構成するほうにむかわなかった。その理由は彼らの知性の発展がかなり早い段階でとられてしまったからである。彼らに要求された知識は新しいことを考えだすのでなく、古いことのおうむがえしのくりかえしであり、その結果中国四千年の間の発明は片手の指でかぞえられるほどにすぎないという。（これには中国人から異論があるだろう。またそれならわが日本はどうだろうか。）つまり孔子（図版）が超自然的なものを討論することに反対し（「子は怪力乱神を語らず」（『論語』）等をさす）、中国人のイマジネーションを、つばみの段階でつみとってしまったのだと。

このことは、いまではよくいわれるが、当時の読者にも説得的な指摘であつたろう。著者は多くの資料を渉猟するなかで、儒家関係とその時期に神話伝説的材料の特別な少なさを感じたにちがいない。

次章では「開闢神話」として、まず二元の力の間でうまれ、カオスから天と地をひらいた盤古を紹介し、陰陽二元から五行、また老子、孔子、墨子、孟子、列子、莊子等諸家の哲学を簡単に説明している。

「中国の神々」の章では、神と天、その混同からはじまって、あの世（Other world）とこの世の類似（デュ・ボース説）を確認し、三つの宗教として儒、仏、道教の混在と相補性を述べる。孔子は神ではないが知識人の信仰の対象になり、道教は民の生活にしみこんでいるものとして、東華王、西王母（図版）の二人の領袖から日常生活の各具体部署の神がみ、たとえば農業、土地、まち、台所、かいこ、おかね、長寿、出入口の神など、それぞれの神話、伝説とともに紹介する。

「星の神話」には、あとに紹介した恒娥が月へ逃げる物語や周知の牽牛・織女、その他星座の物語がある。

「雷・稲妻・風・雨」や「火」の神がみの話。

「水の神話」はいろいろな竜の話（図版）である。

「疫病神」までが、なんと「神」としてあるが、よくしたもので「薬や魔除けの神の話」もちゃんとある、と紹介する。

不老不死の身とは仙人のことで、(日本の七福神に似た)「八仙の話」もある。

以上、ほとんどは道教関係だが、仏教(図版)では「慈悲の女神」——観音さまの話などがある。

「サルはいかにして神となり給うたか」というタイトルで西洋人をおどろかせるのは、じつは『西遊記』であり、「キツネの伝説」とはあの『聊齋志異』の物語であった。

一神教の西洋人はさぞあきれたにちがいない。これらが全部神であるか、神か人かわからぬ存在である。無数というほど混在して、けっして体系だっていない。しかも現実との関係が濃厚である。ギリシャ神話をよく知る人たちもずいぶんおどろいたことだろう。

さて、以下に「星の神話」の章から、ひとつ、自然や人間のいろいろな解釈がでてきてたのしい話を紹介しよう。じつはこれも、上述のように、ひとつかいくつかわからない話があちこちの書物にすこしずつあって、これはのちにつけたりけずったりしてまとめられたものである。だから一部分、目や耳にしたことがあるかもしれない。

今回は中国の神話を読むというよりは、その西洋への紹介をフォローしているのだから、中国語からではなく、英語からの翻訳(あるいは抄訳)として読んでみたい。固有名詞や「陰、陽」など中国固有の概念語は英文では発音だけで漢字はない。ここでは妥協はしたが、なるべく漢字を使わないようにした。日本人ならすぐわかった気になる中国の話……というのではこまるわけだ。英語を通したつもりで西洋人になって(!?)日本の話をはじめて読んでみよう。……とかんがえて「直訳」していたら、カタカナだらけで、いまの若い人たちの雑誌の文体のようになってしまった。しかし、その人たちの頭もかなり西洋化し東洋ばなれていいるから、この追体験もあんがいうまくいくかもしれない。

ジョン・ローンが演じたのはラスト・エンペラーであり、ちょうどその時代、著者は中国でこれらの研究をしていたとおもわれるが、以下の物語は神話の三皇五帝、いわばファースト・エンペラーズのころB.C.24世紀のことである。

### プロローグ (要約)

エンペラー・ヤオ(堯)の治世、一人の弓の名人が皇帝に見出されて、神技アーチャーの意でシェンイー(神羿)と名づけられ、木工のチーフ・メカニシャンとして召しかえられる。

そのころ転変地異や災害があいついで国中をおそった。皇帝はこれらの災いをおこしていたデビルやモンスターたちを退治するようシェンイーに命じる。

シェンイーは、九羽の怪鳥が巨石に火をふきつけてにせの太陽を九つもつくり、早ばつをおこしていたのをみつけて、強弓で射ぬき、あらしをおこしていた風の精や、洪水をおこしていた川の精を射ころし、大きな功績をあ



HSI WANG MU

げる。そして、そのときつれられていた水の精の妹ホンオー（恒娥、またチャンオー嫦娥などともよぶ）を救い、その縁でふたりは結婚することになる。

シェンイーはまた、怪物怪鳥を退治してシーワンムー（西王母）を救い、さらにその求めに応じて宮殿をたてる。そのときシェンイーは願いでてシーワンムーから不老不死で、しかも空中飛行ができるようになるピルをもらう。

ピルは十二か月のエクササイズとダイエットによる準備コースを経ないと十分な効果がないときかされ、シェンイーは盗難をおそれて自宅の屋根うらにかくし、このエクササイズ・コースをはじめます。

#### ホンオー フライズ トゥ・ザ・ムーン

さて、ホンオーは夫のるすに、香りのたちこめるへやのなかで、屋根のはりからさしこんでくるような白い光をみつけた。はしごのたすけをかりてそこまで登ってみた彼女は、不老不死のピルをみつけ、それをのんでしまう。

彼女は突然、重力の法則の支配から解放され、つばさがはえたように感じる。最初の空中散歩を試みていると、夫のシェンイーが帰ってきた。彼はピルを確認しにいったが、みつからないので、いったいどうしたのかと妻にたずねる。

恐れにかられた若い妻は窓をあけて外へ飛びだす。シェンイーは弓をとってあとを追う。ちょうど満月で外は明かるい。妻が自分の目のまを急いで飛び去っていく（凶版）。もうすこしとばかり彼が加速したそのとき、一陣の突風がおそってきて、彼はまるで落ち葉のように地面にころがってしまった。

ホンオーはフライトを続け、月の世界に達した。ガラスのようにかがやき、広大で、そしてとても寒いところだ。植物といえば唯一、シナモンの木だけしかない。いかなる生き物も見えなかった。

突然、彼女はせきこんで、あの不老不死のピルの皮をはきだし、それは最高純度のヒスイのように白い一匹のウサギに変身した。こ

れがイン（陰）あるいは女性のスピリットのもとであった。ホンオーは口中ののが味を感じ、露をすこし飲み、空腹を感じたのでシナモンを食べた。そして彼女は、この月の世界に居を定める。

さてシェンイーはといえば、彼はハリケーンによって高い山へ運びあげられた。ある宮殿の門のまえにいることに気づいたとき、彼はなかに招じいれられ、そこがトンホアワン（東華王）、つまりシーワンムー（西王母）の夫トンワンクン（東王公）の宮殿であることがわかった。

#### サン・パレスと夜明けの鳥

この不老不死の神はシェンイーに、すべてまえから定まっていた運命と慰め、おまえもそろそろ定年と、功労にむくいて太陽の宮殿を与え、不老不死でくらさせるためによびよせたのだという。ホンオーが不老不死となって月宮にいるから、こうしてこそイン（陰）とヤン（陽）の結婚による結合になるというのだ。

神は、太陽の高熱に耐えられるようにと、赤唐サルサというハーブで作ったケーキを彼にたべさせ、ホンオーの月宮への通行証を与えた。しかし逆にホンオーが月から太陽に近づくことはできないという。これが、月の光は太陽に負うもので、またその距離によって月のプロポーションに満ち欠けができ、月の明暗も太陽の運行によるというゆえんである。

トンワンクンはまた、日出と日没、昼と夜の法則を知らねばと、それを教えてくれる金の羽毛の鳥をつれていくよう命じる。これがヤン（陽）つまり男性のスピリットのもとである。

その鳥は太陽の陽性を食い、三本足で、イースト・チャイナ・シーのフーサン（扶桑）〔日の出るところに育つ木という、また日本をさすのにも使われる（筆者）〕の巨木にとまっているという。この鳥は夜あけの源の近くにおいて、太陽がモーニング・シャワーを使っているのを見ると、天をゆるがすような声をあげて人間たちを起こすのだ。これを太陽宮へつれていけば、一日の運行の法則もすべて



わかると。

もらってみると、その金の鳥はよく通る声におごそかな姿をしていた。この鳥がうんだ卵からかえった赤いトサカのヒナたちは、やがて毎朝、金の親鳥の鳴き声にこたえて鳴くのだという。いま地上で毎朝時を告げるオンドリたちはこの天の鳥の末えいなのだ。

### シェンイー月を訪ねる

シェンイーは天の鳥にまたがって天空をつききり、昼ごろには太陽ディスクについた。広い地平線のただなかから見ると、そこは地上と同様に広大ではあったが、あの太陽の動きは見えなかった。彼はそこで憂いも悩みもなく完全な幸福をエンジョイした。

やがて、しかし妻ホンオーとの過ぎさった幸福な時の思いがよみがえり、彼は太陽の光線にのって月へ飛ぶ。シナモンの木や凍ったような地平線が見え、ずっと離れた一角に、彼はホンオーがたったひとりで見つけた。

彼を見るとホンオーは逃げようとしたが、シェンイーはやさしく、その手をとって、いった。“わしはいまサン・パレスに住んでいる。過去のことは気にしなくていい。”彼はシナモンの木を切り、それをはりにし、宝石貴石を材料に宮殿をたてクワンハンクン（広寒宮）“グレート・コールド・パレス”と名づけた。それからというもの、それぞれの月の15日めに、彼はホンオーの宮殿をたずねた。これがヤン（陽）とイン（陰）、男性と女性の結合であり、その時の月の大きなかがやきの原因である。

シェンイーは彼の太陽の王国にかえり、すばらしい宮殿をたて、ロンリー・パーク・パレスと名づけた。

このときから、太陽と月はそれぞれ自身のあるじをもった。このレジームはヤオ時代から49年（2309B.C.）のことである。

老皇帝はシェンイーとその妻がともに天上へのぼったときいて、功を尽くしてくれたその男を失うのを悲しんで、彼に“国々の統治者”の称号をおくった。この神と女神の肖像は、前者が太陽をもち、後者は月をもってい

る。

中国人たちは、後世、後日談をつけくわえ、ホンオーがガマガエルに変身したといい、そしてその輪廓は月の表面にも見てとれるという。

もともと神話や伝説は、多くがもっとも古い「文学」であり、また多くが同時に世界や地域や人間の創生を解説したり、地形・地理を説明したり、人間や動物の本能や習性を解いたり、自然現象を解釈したりする、いわばそのころの「科学」でもあった。それは人びとのイメージがつくりだした創作であるが、人びとの支配に利用されたこともある。

そのような解釈は、いまそれを読むことによって、なにがしかその民族や集団のものの考えかたの原型にふれることができるともいえるし、「対照研究」などすればある種の学問として経済生活や地位名声のたねにもなる。しかしもっと素朴な感覚でいえば、その解釈がよくできていれば、読んでたのしく、聞いておもしろい。

エデンの東の、はるか遠くのふしぎの国——



THE BUDDHIST TRIAD

中国、その中国人の自然・人間への解釈については、西洋人も興味深く感じたことだろう。この種の他民族・他地域人の解釈は、自分たちのものと類似すればそれもおもしろく、起源や伝播、類似性が問題になるし、異なっていてしかもなにかの「説得性」があれば、その異なりかたがまた大いに興味深いものである。

塩谷温『支那文学概論』につきのような述懐がある。

「嘗てライプチヒ大学に在り、コンラーチー教授の楚辞の講義を承はった際に、教授は兎が杵を以て臼を搗く図を黒板に画いて、大いに聴講者の喝采を博せられたことを記憶している。吾人には一向珍しくもないことでも西洋の学生には余程面白く感じられたのであらう。……」

そのウサギは月の外見の部分の説明したにすぎない。そのほかに、この物語のなかでは、自然災害の解釈のほか、自然としての月と太陽の不滅性、またそれぞれの外見的特徴や性質、おたがいの関係や作用の由来を説明し、中国の伝統的な二元概念——陰と陽の来源を解き、男女両性の性質・作用・関係とその結合をも説明している。その他夜明けの鶏鳴の由来もあり、これらに古来東西を問わず欲ばりたちによって追求された不老不死や、ロマンチストたちによって「昔、鳥だったのかも……」というほどあこがれられた空中飛行を織りこんでつくられたストーリーである。

さきのライプチヒの学生たちの喝采にもかわらず、じつは月にかんする伝説・俗信は古来世界に多数あって、しかも月の満ち欠けや外観・性質などから、かなり各地で共通の要素が多いようだ。

古くからの日中両国のこの関係である。日本の「ウサギのもちつき」や竹取物語、羽衣伝説などはあげるまでもないであろう。

文化人類学者らによれば、月のもよりの部分の説明に用いられてきたウサギの各種伝説は、アジア・北米大陸から南アフリカのほかヨーロッパにもおよぶ広い分布があるという。動物ではさらにこのガマガエルのほか、ヘビ・クマ・カニ・ネズミなどにも擬せられるが、これらはその脱皮や冬眠、穴ごもりの習性が月の消長のイメージとかさなるためという解説がなされて

いる。またこれらの動物は水と関連させられることも多く、月のもよりの水をくむ人の姿とする伝説もよく知られているが、これはヨーロッパ・北米・オセアニア・北アジアに多く、日本でもアイヌと沖縄の南北両端に残っているという。水といえば、この物語にもホンオーが渴きをいやす露としてでてくるが、直接に生命維持、成長の要件であるとともに、農漁業に必須の条件として間接的にも生命、成長につながっている。

一方、生命、成長といえば、成育、死と生殖、誕生（再生）そして不老不死と関連していくものであり、それらもこの物語に語られているが、これはもともと月の消長からイメージされたものであると考えられる。

また、太陽と月は近年はやりの「明るさ」対「暗さ」でもあるが、むかしから各地で二元的な世界観の基盤にもなっているとおもわれ、それは西洋で「月夜にドラキュラ」という設定、月が狂気や愚かさ、弱さをあらわし、英語 lunar にもその意味があるというのとも通じるものである。この物語では中国の伝統的な陰陽二元の源



THE DOOR-GOD—MILITARY

として説明されている。

長く強い宗教的信仰をもち、伝統をもちつつ、多くの文学そして科学や技術をつくり、育てだし、合理的な考えかたを身につけてきた西洋人たちに、エキゾチックなふしぎの国の、しかし理解をはるかに超えるというほどでなく、それなりに「説得性」をもった自然の解釈——神話・伝説は、やはりエキゾチックでふしぎで、しかもおもしろく受けとめられたことであろうか。

またこの「陰と陽」の原理が、どれほど世界とくに人間をうまく説明しうるかというのも、おもしろい問題である。いうまでもなく人間にとっては、自然をどうとらえるかと同様、人間をどうとらえるかが根本問題であって、ただしくとらえなければ、どんな思想体系も革命事業も理想も実現が困難になるという例は、最近でもいやというほど目や耳にした。

この物語のなかで「陰」を生みだしたホンオーは女性を代表し、「陽」のシェンイーは男性を代表させられている。ホンオーはシェンイーの勇しい働きや腕まえにひかれて結婚し、家庭にはいった。ところが仕事熱心な夫も、なにかかくしごとをしていたのだ。しかしホンオーはぎゃくに責められ、逃げだしてしまった。夫は追ったがつかまえられなかった。これは家や夫の束縛から自由と独立を求めた女の、つまり女性自立の話でもある。（「ピル」を手に入れて、それをはたした!?)

しかし、さらに深読みをする人もいるだろう。たとえば「伝説は文字を知らない作家たちの作品」だといひ、神話をも深く研究した魯迅である。その有名な『狂人日記』の冒頭部分には「狂気」を演出する月が効果的に使われてもいる。さてその魯迅に『故事新編』という作品集がある。よく知られた神話・伝説・歴史人物などを、新しい解釈でおもしろく書きかえたもので、日本でいえば太宰治の『お伽草紙』がある。魯迅のほうが人間を深読みしているようにおもえるが、いずれにしてもともに弾圧のきびしい冬の時代の文学手法であって、書かれた時期がその価値をさらに高めている、そういった作品である。さてその『故事新編』のなかの『奔月』（月に走る）という一篇がこの物語を材料にしている。

そこでは、嫦娥（チャンオー＝ホンオー）が下女たちにかこまれ、なに不自由ない生活をしている。羿（イー）のほうは毎日自慢の弓を生かして獵に出、豪華な食卓や毛皮が彼女をよろこばせた……こともあった。しかしやがて、腕がよすぎて周辺の鳥獸をとりつくしてしまい（すでに「乱獲」を予見している!?)、ついには一日足を棒にしても獲物はカラスが二三羽。毎日毎食カラス肉の炸醬麵<sup>チャーシューメン</sup>に、嫦娥も不満をつのらせ、やがてマージャンなどでは解消できなくなる。腕がよく仕事熱心な羿ではあったが、いまはそれが役立たずの粗大ゴミにみえてくる。彼はといえば、自分は不老不死の仙薬があるが、おまえにはせいぜい蓄積をしてやって養老保険がわりに……とばかり、必死にベタベタと女房孝行をするのだが、それも彼女には濡れ落葉とでもいおうか、うとましくてたまらない。そして結局、夫はひとりで天へ昇り、あとには自分だけが残されるというのだ。「なんでこんな人と……」とおもうと嫦娥は絶望的になり、とうとうある日、夫が獵に出たるすに彼の仙薬をのんで月へ行ってしまうのである。むかし、にせの太陽を九つも射おとした羿だったが、老いた今は月を射ても月はすこしゆれただけであった。……これがおもに羿の側から描かれている。

小説『祝福』や『離婚』それに（『人形の家』の）『ノラは家出してからどうなったか』という評論などで女性解放と社会の関連を強烈に問題提起した魯迅であるが、一方でこの作品では、「有産」「有閑」の「しあわせな」女性の身勝手さ、「感謝知らずの女」をえがき、仕事熱心で善良で、女性に喜ばれようとしながら、その心をつかみきれない男のツラさを描いて妙である。

そういえば紹介した本の英文の原文では、ホンオーがシェンイーに救いだされ、はじめて知りあったとき、女性は救出の礼をいってから、相手がなにもいっていないのに、突然つけ加えて“I will agree to be your wife.”ということになっている。「わたしィ……おくさんになってあげてもいいんだけどォ……」とでもいうのだろうか。またそういえば、さし絵（表紙図）で逃げていく女性の表情には解放感と悲しさ(?)とそして若干のしたたかさを見てとれるような気がする。

しかし、たしかに男は自分だけのために一粒だけのピルをかくしていたのだ。自分さえ昇天できればいいのだ。やさしくても結局は身勝手なものである。

そして、そのように男と女の間には「深く暗い川」があったのだが、それにもかかわらず、物語のつづきで「それでもやっぱり恋しくて」、シェンイーは月を訪れ、「今夜も船を出し」てホンオーの住いを訪れることになる。さすが「文字を知らない作家たち」がつくりあげた、陰陽二元の世界の男女両性をよく見すえた作品というべきだろうか。

中国の社会では、社会的に、そしてその末端の家族制のなかで、儒教を中心とした古い道徳観によって女性が抑圧されてきたが、被抑圧者の知恵なのか、人びとの実生



SPIRIT OF THE WELL



CONFUCIUS: THE GREAT UNAPOTHEOSIZED GOD OF CHINA

活のなかにしみついた道教の現実観の影響か、男女比の絶対数が関係するのか、人間（人であり人の間である）としては、男女の間では女性の力が意外に強い。同様に女性が強いといわれる西洋人たちは、当時こういった物語をかなりのふしぎさとそして共感でもって興味深く読んだことであろう。

なお、中国神話伝説についての、他の西洋人研究者としては A. マッケンジー、J. C. ファーガソン、H. マスペロ、B. カールグレン等がある。日本では青木正児、森三樹三郎等多数、現代中国では袁珂が代表的である。

## LIBRARY INFORMATION

— 第 6 号 — 1990年3月27日

編集発行 大阪外国語大学附属図書館

印刷 (株)ユニワールド印刷センター